

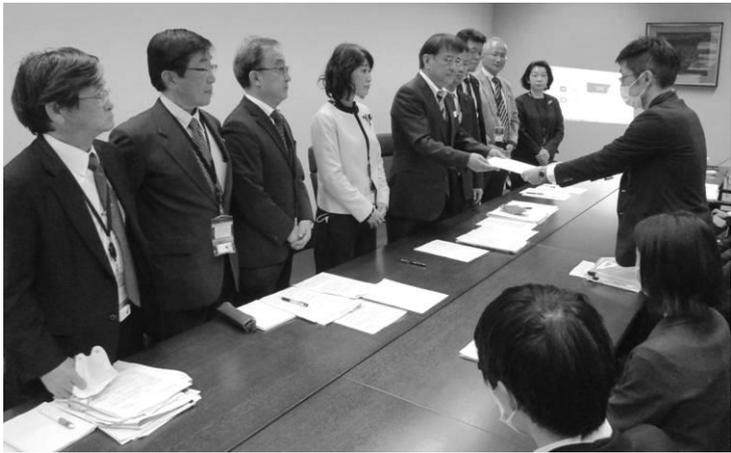
民主島根

2022年
12.4
第1417号

発行所 松江市袖師町3-6 TEL 0852-24-2444
日本共産党島根県委員会 FAX 0852-24-6369

原発・江の川治水・教育問題など31項目要求 老朽原発の酷使方針の撤回を

党島根県委 地方議員9人が政府交渉



申し入れる尾村県議（左から5人目）ら（国会内）

日本共産党島根県委員会と党島根県議団は11月17日、国会内で政府交渉し8省庁に31項目の県民要求を申し入れた。尾村利成、大田陽介両県議ら9人の地方議員が駆けつけました。島根原発の問題では、経済産業省資源エネルギー庁、原子力規制委員会に対し、原発の60年を超える長期運転を可能にし、老朽原発を酷使する方針の撤回や島根原発の稼働を断念するよう要求。内閣府には「机上の空論」と言わざるを得ない避難計画の実効性の再検証も求めました。資源エネルギー庁の担当者は「専門家の意見を聞きながら年末に向けて議論を深めたい」と説明し、規制委の担当者が「し



要請する党県議団と原発30キロ圏内の地方議員（松江市）

つかりと検討する」と回答したことにに対し、参加者は「再稼働もプルサーマル運転も地元の合意はない」と強調し、「規制委は厳しく規制・監視を」と訴えました。豪雨災害が頻発する江の川流域の治水対策では、国土交通省に対し、

島根原発の稼働断念せよ

党県議団らが中電へ申し入れ

早期に治水対策が実施できるよう、国の防災・減災事業予算の大幅な増額などを要望しました。新型コロナウイルス対策強化などを厚生労働省に、教育環境改善を文部科学省に、農業・内水面漁業の再生を農林水産省と環境省に要請しました。原則40年、最長60年としてきた原発の運転期間延長を検討する政府方針が明らかになったことを受け、日本共産党島根県議団は11月22日、松江市の中国電力島根支社を訪れ、島根原発2号機の運転期間は延長せず、原発ゼロを断念するように申し入れました。尾村利成県議は、新型コロナウイルス第6波、第7波を

つていないことにふれ「住民の声を直接聞く説明会の開催を」と求めました。応対した地域共生部の森安勝部長は「現時点で運転延長の具体的な計画

住みよい島根をつくろう 県政を考えるつどい 各界から報告

「しまねの未来と県政を考えるつどい2022」が11月20日、松江市内で開かれ、約60人が参加しました。このつどいは、しまね地域自治研究所（保母武彦理事長）が来春の県知事選を前に、県民生活を分析し課題・政策を明らかにする目的で編集した『島根発・地方再生への提言2』の発刊を機に実行委員会が開催されたものです。島根大学教授の関耕平氏が「地域再生に向けた転換を足元からしまねの未来と県政を考える」と題して基調講演。関氏は、前回県知事選

はなく、政府の議論をしっかりと注視していきたい」と説明。プルサーマルについては「地域の理解をいただくよう最大限努力していく」と答えました。の保守分裂について、県民生活の困難と県政の行き詰まりの噴出の結果だと分析し、「県財政の振り向ける先を公共事業偏重ではなく、年金や医療、福祉といった準公的資金の充実に向けてこそ地域を豊かにできる」と指摘。「住民の実践が行政を動かす制度強化してきた。新自由主義の矛盾が拡大する日本社会を変える選

日本共産党演説会

12月18日(日)

■10:00～
松江テルサホール
■14:00～
出雲ロイヤルホテル
平安の間

弁士

党政策委員長・副委員長(参院議員)

田村 智子

【弁士が変更となりました】

私たちもお話します



【出雲会場】

県議会議員
大田陽介



【松江会場】

県議会議員
尾村としなり

鼓動 早いもので、「鼓動」執筆メンバーに加わって二年が経つ。当初は、常体の文章（文末を「だ・である」調で結ぶもの）を書くことに抵抗があった。なぜなら、文体が常体であるが故に、読者に尊大な印象をもたれはしないかと危惧する自分がいたからだ。それは今でも変わらない▼常体という様式は文章を硬派にし、書き手の印象もハードにしがちだ。その印象通りに、シビアなネタを舌鋒鋭く書き切る力があれば悩みも少なかるうが、現実それは難しい。それでも何度か時宜に合うテーマを見つけ挑戦した。が、結局力不足により手放さざるを得ず、それはそれで悔しい思いもした▼とはいえ、文体的印象を乗り越えよう、何とか自分らしさを織り込もうと、自分なりに腐心してきたのも事実である。実際、この文章修行のような日々は辛い。しかし苦労とは違う。それは表現することの難しさと楽しみを得る時間であり、言葉への責任を実感する機会だ▼文章を書くとは、「ペンは剣よりも強し」の格言を引くまでもなく、「言葉の力」に改めて気づかされることだ。そして、言葉が、それをを用いる者自身の品性をも反映する、そういう怖さも備えたものだとも自覚する過程だ▼文筆家でなくとも、様々なツールを通じて個人の意見が自由に発信可能となり、多くの言葉が交錯する世界に我々は生きている。意志あるものは全て、自分の内に「ペン」を持っている証だともいえよう。であるからこそ、各々が、自らの内なる「ペン」の有りようを問われているということ忘れてはならない。それを今、自戒を込めて思うのである。(江)